
守森学園さくら組「花見」

媛野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守森学園さくら組「花見」

【Nコード】

N7502N

【作者名】

媛野

【あらすじ】

私立進学校に『守森学園』という学校が存在する。

幼等部から高等部まであるエスカレーター制のこの学校は、他校とは一味違った。

何が違うかって？

それは学校の設備でも授業のカリキュラムでもなく、生徒一人ひとりがひと癖もふた癖もあるのです。

校庭に等間隔で植えられた楓の木がそよぎ、地面に薄い陰をつくっている。

その様子を教室の机の上から眺めていた吉野時子は、一つ大きな欠伸をすると目に浮かんだ涙を拭い取った。その口から零れるのは、決まってひとつ。

「暇だよ」

それだけだった。

「あれエ？ 時子、あんた暇なの？」

背後から声がして彼女はむっくりと起き上がった。振り返って視線を向けた先には目元の涼しい和風美人の柳千尋やなぎちひろが、不敵な笑みを浮かべていた。

このとき時子の長年研ぎ澄まされてきた第六感が危険信号を発する。明らかに千尋は何かを企んでいる。咄嗟に時子は助けを求めて反対側を見た。

彼女が体を逆に捻って向いた先には、三人の生徒が人形劇をしていた。

やけに人形の顔がリアルなのは目を瞑ることにしよう。

三人の生徒の名前は、背は小さいくせして名前は大柳翔おおやなぎかける。常に木星人と交信を続ける謎の少女、夢野春。未来はスーパー演劇スターと信じてやまない、またもやおチビの鼓亮智つづみりょうち。

時子が呆れた面持ちで三人を見ていると、大柳翔の声が聞こえてくる。

「確かにここにあったんだ！」

なかなか感情がこもっていて、見ている側も（リアル人形を除いて）引き込まれる芝居である。そこに夢野春が限りなく棒読みの言葉を入れてきた。

「ああ、ホントだ」

いや、いったい夢野春は何を見て頷いたのかさっぱり分からない。さすが木星人と交信を図れる少女である。

鼓亮智の操る人形の口が先ほどからパクパクと何かを喋っているが、亮智本人の開いた口からは一言も言葉が漏れてくる事は無い。

「亮智、なんか言えよ。」

翔が少し唇を尖らせて言う。すると鼓亮智が振り返って言った：「というより、人形をパクパクと動かした。」

つまり、自分のようなビッグスターは腹話術もマスターしなければならぬという事らしい。

時子は何故、鼓亮智のいわんとする事が理解できるのか首を捻って後ろを見ると、背後に柳千尋が立っていた。どうやらすべては彼女の巧みな通訳によるものだったらしい。

はつきり言って、時子は彼女の存在に動揺してしまう。断言する。柳千尋は夢野春以上に謎な部分が多い。

柳千尋の目は、口が笑みを作ると並行してゆっくり細められた。

「で、暇なのよね？」

確かに暇なのだ。だがしかし、あまり彼女の手伝いをしたくない。時子は慌てて周りを見渡し、外で花を散らす桜を見てハタと思いついた。

「そつだ、花見、花見をしよう！」

無駄に散ってしまう桜をこうして眺めているより、実際に外に行つて間近で楽しんだ方が何倍も得をした気分になれるはずだ。

時子の声に、教室に残っていた生徒のうち数人が顔をあげる。人形劇をしていた三人も視線をこちらに向けた。中でも夢野春の視線が見透かされそうで痛かったが、彼女が読心術を心得ていない事を願う他に時子に真実を隠し通せる術は無い。

時子はじりじりと振り返り、勝ち誇った笑みを浮かべて柳千尋を見た。

彼女は柳眉を寄せて眉間に皺を寄せていたが、軽い溜め息を吐くと口を開いた。

「じゃ、五時に各自食べ物を持って校庭の桜の前に集合ね」

柳千尋、謎が多い分、優しさもかけ合せているお方のようだ。
時子はホッと息をつき、クラスの皆に向かって微笑んだ。

わかってるわよね？ みんな。

実は、クラスで一番の実権を持っているのは、吉野時子…お前だ。

* * *

夕刻五時十八分。

校庭に唯一咲く一本の大きな桜の木の下に、一年C組の生徒たちが集った。みんなで持ち寄ったお菓子とジュースは紙皿と紙コップに入れて分けられ、地面に敷かれた青いビニールシートは一枚ではやはり座りきれなかった。

余った生徒たちは思い思いにフェンスに寄り掛かったり、木に背を預けるなどして工夫を凝らしてくつろいでいる様子である。

「うわ、けっこう集ったな」

吉野時子の隣に腰を下ろした犬神祥平がオレンジジュースの入った紙コップを片手に呟いた。
いぬがみしょうへい

校庭の方では再び鼓亮智と夢野春、大柳翔によって人形劇が上演されていた。

「ああ!？」

と、大柳翔が声を上げる。どうやら教室でやっていた人形劇の続きをやっているようだ。大柳翔の操る人形の顔が、おぞましい表情に歪んでいる。そしてなぜ、翔が声を上げたのかというと、うち

やん（人形の名前）が何かを発見したらしい。

「これだ、私が探していたのは！」

ああ、うーちゃん。あなたは女の子なのに男の大柳翔によって操られているのね……。しかし、良かった。うーちゃんの探しているものは見つかったらしい。

「これが無くなった変死体です！」

うわぁー、むごい。

時子は思わず両手を合わせて拝んでしまった。彼女の隣では犬神祥平が声を立てて笑っていた。

いったい何が面白いんでしょうか犬神くん。

始めは少しぎこちなかったお花見も、時間が経つにつれてみんなはめを外して声を上げて笑うようになった。

時子は、この花見を催した理由がたとえ利己的で不純であったとしても、皆が喜んでくれたことを素直に喜んだ。

「やっぱり皆でやると楽しいね」

と、手に持った紙コップの中身を空にして言う。そこに、両手でクーラーボックスを抱え持った柳千尋が姿を現した。

時子の脳裏にまさか！ という懸念が過ぎる。思わずその視線は自然と、三人で行っている人形劇のほうへ向いた。未だに変死体を連呼している彼らのなんと和気あいあいとしていることが。なんて遠い目になる。

さらに人形劇は話が進み、夢野春が棒読みでカンペを堂々と読み上げた。

「おお、まさしくこれだ！ これこそ究極の”毛生え薬”だ！」

そんな髪について悩んでいたのかキヤサリン（夢野が操る人形の名前）。それより、死人はどうなったんでしょうか……。一瞬の早業でいずこへか。

そうこうしている内に、柳千尋が時子のすぐ目の前にまで来て、クーラーボックスを地面に置いた。その何とも重そうな音に、まず時子の顔色が青冷めていく。

まさかとは思うが、目の前で暑そうに制服をパタパタさせる柳千尋ならば殺^やりそうだ。

時子は恐る恐る、千尋の顔と制服の隅々までチェックした。返り血がないか、一応調べたのだ。

しばらく、重い沈黙が時子と柳千尋の間にだけ垂れ込めた。つと、柳千尋が立ちあがる。ぎよっとした時子は素早い動作でその場に仰け反り、不思議そうに振り返る犬神祥平に苦笑いを浮かべて手を振ってみたり。

クーラーボックスから立ち上がった柳千尋は周りをぐるりと見渡し、ざっとそこにいる人数を数えているようだった。たぶん、ここにいる人を眠らすのにどれくらいの時間を要するか計算でもしているのだろう。

彼女は重そうなクーラーボックスをパチンパチンとはずし、ついに蓋を開けた。

ふわりと中から冷気が上がり、時子は気絶することを覚悟で中を覗きこんだ。

「ああ、時子が一番最初に選びなよ」

と言つて柳千尋がグイツとクーラーボックスを近づけて来た。時子は驚いて首を引いてしまったが、よくよく見ると、その中にはぎつしりとアイスクリームが詰め込まれていた。

驚きと意外さで柳千尋を仰ぎ見れば、彼女は得意げに口の端を吊り上げて笑った。

「おい、皆。これ、私からの差し入れ！」

と言つて、彼女は片手にアイスクリームを掲げた。

一番反応が早かったのは鼓亮智だった。その意地汚さを業界で応用すれば、きつと大物芸人になれるだろう。そう、芸人ではなく芸人というところが味噌だ。

柳千尋が持つて来たクーラーボックスの中身は、すぐに空となった。

時子は結局、最後に残ったバニラモナカをいただき、封を開けた。桜を見ながらアイスクリームを食べるのも良いなあ、と思いなら一口冷たいバニラアイスのモナカを頬張った。隣を見ると、柳千尋がジュースの入った紙コップを口づけ、傾けているところだった。

「あれ？ アイス食べないの？」

「え？ ああ、数が丁度一つ足りなかった」

と、彼女は涼しい顔をして微笑む。

時子は少し疑ってしまったことの負い目を感じて、口をつけた方とは反対側のモナカを割って半分差しだした。

目の前に白いバニラアイスクリームの入ったモナカアイス突き出され、暫くそれを注視していた柳千尋だったが、片手を軽く挙げて受け取った。

やっぱり、花見をするのは良いなあと時子は微笑みながら、残ったアイスを口につめ込んだ。

花見　　了

（後書き）

旧サイトで掲載していたものにすこし手を加えました。短編シリーズ連作ものでしたので、続編も気まぐれに載せるかも知れませんが連載等は考えておりませんのでご了承下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7502n/>

守森学園さくら組「花見」

2011年4月1日14時40分発行